

いは盗賊として生活することができた(一一一—三ページ)。

このように文明の物理的条件が大きくちがっているから、どんなに経済タイプを——純粹に典型という意味でだが——ひろげても、その特殊性は地方によって大巾にことならざるをえない。しかし、そうだからといって、継起的社会タイプの理論がわれわれの手ににぎらせてくれるこの万能道具の役立ちをにぶらせてはならない。

「古代インドの奴隸制」は、東洋のマルクス主義者が東洋の文化についてなした新たな先駆者的研究を代表するもので、以前には植民地であった諸民族の歴史をてらす最初の光源の一つとなるにちがいない。またチャトパディア(D. Chattopadhyaya)の著「Tokay-ata」(P.H. Bombay)は、古代インドの唯物論哲学である Charvaka の研究であるが、歴史研究のあらゆる分野の事実を援用して文化の問題を説明したマルクス主義思想のいちじるしい労作で、チャイルドやタイソンの業績と肩をならべることができる。このような書物がインドで出版されたことは、タムソンの見解をみごとに確証するものだが、その見解とはインドにマルクス主義がひろまれば、それによって今日まで解決できなかった歴史上の諸問題を解決に近づけるだろうというのであった。

(註) Gordon Child, What Happened in History (Pelican, 1954), 116—7; George Thompson, the First Philosophers (1955), 74—6; Child, 92—6, Thompson, 79—82.

## S・ダグラス論文をめぐる

F・ギヤナウエイ

(F. Gannaway)

S・ダグラスの論文(『マルクシズム・ツデー』誌十二月)は、R・ジャーディンの提起した問題のいくつかを説明するもののようにおもわれるが、種々の定義を整理するさいには混乱をくわえたかのよう

である。

ダグラスはマルクスの四つの生産様式を引用する——

- (一) 原始共同体(アジア的)
- (二) 奴隸制(古代的)
- (三) 封建制
- (四) 資本制

かれは上記(一)を二つの社会発展段階に分け、それらをひっくり返して、手がるに人種学的段階と名づける。野蛮と未開、それともまた(歴史的発展の対極でこれに対応する局面をあげるならば)社会主義と共産主義、これらのあいだの差異は種族的、人種学的発展の差異によって決まるのではない。ジャーディンへの回答の要旨は、種々の種族が同じ段階を通過したということであって、「中国人はシンディアスミアン家族、原始共同体の最後の諸段階にたっし、そこから人種学的一段階(奴隸制)をまるきりとびこえていったとは考えられない」とのべている。ダグラスはマルクスの生産様式をもととする時代区分を引用しながら、なぜまた奴隸制を人種学的段階などといいたおして問題をゴタゴタさせるのであろうか。

前記の四段階に社会主義をつけくわえるならば、「野蛮、未開、文明という大きな三つの時代にあらわれた」生産様式と生産関係の変化にもとづく五つの経済段階をえることになる。

おなじようなことをもう一つ——ダグラスは、奴隸社会はたんなる無能のためではなくて、その社会関係が社会の発展にとって足かせとして作用したがゆえに崩壊したという。私もその通りだとおもう。それだのにあとになってかれがいうには、生産力と生産手段の発達水準が低いかれども未開水準よりも進んでいて、しかもいっそう前進した経済から孤立している社会では、ほとんど不可避免的に奴隸経済が発生するという。

前記の文中、「けれども」といわないで、生産力、生産手段がかれのいう未開段階(明確を期するため原始共産主義というほうが正しい

だろう)よりも進んでいるからといいかえるとき、生産力、生産手段の変化の意味に関連して、かれの所論ははじめて正しいものとなる。同志ダグラスは討論を正しい路線にそって前進させたし、また自分の定義を明確にしそれをつらぬきとおすほど、この問題にいっそうの進歩をもたらし、このような興味深く価値ある問題の研究に寄与することができると思われる。

## 中国史における諸段階

E・G・プリーブランク  
(E. G. Pulleyblank)

わたくしはマルクス主義者でもなければ、マルクス理論の専門家でもないで、歴史における社会発展の諸段階の理論がマルクス主義の中でどれだけ重要な位置を占めているのかを論じるには不適任である。しかし今日の日本および中国の歴史家の仕事を読んだものは、かれらが東アジアの歴史をマルクス主義のワクの中にはめようとしていくつかの問題に直面したと考えていることを認めないわけにはいかない。わたくしのようなアウトサイダーにとっては、これらの諸問題はどうみても非現実的なものと思われる。古代奴隸制、中世封建制、近代資本主義、社会主義、共産主義は一九世紀に通用していた世界(ヨーロッパ)歴史を概念化したものである。これがヘーゲルの人類史にたいする弁証法的見解と密接に相似していることは明白である。マルクスが、かれ自身「東洋的社会」ということばにどのような内容を付与していようと、(そして、この内容はマルクスの生涯のそれぞれの時期によって変化したようである)またそれが「古代奴隸制」に先行する段階であるか、あるいはまた異った発展であるかにかかわらなく、この概念には時間を超越した、変化しない東洋という考えがこめられていたことは否定できない。東洋の過去は、歴史的で、過程的な西歐のそれとは種類のちがったものである。

このようなわけだから、中国と日本のマルクス主義者たちが、この概念が不適当なものだと考えたのは驚くべきことではない。かれらがそれを採用しただけは、それは普通「古代奴隸制」以前の段階としてであり、通常有史前の時代におかれていた。ごくわづかの例外をのぞいて、「東洋的社会」を明白な社会の種とみなし、歴史時代における中国を特徴づけるためにこのことばを使用することを今日固執する人たちは、西歐のマルクス主義者の間に見出されるのである。中国と日本のマルクス主義者は、そうするよりも、一般に東アジアが西歐と同じ歴史の発展段階をたどったことは自明のこととみなし、「奴隸制社会」から「封建制」への移行の諸問題を規定することおよび「封建制」の中に「資本主義の芽」を見つけだすことにかれらの注意を集中している。これらの時代区分の諸問題にたいする高名な歴史家たちのあつた解答がきわめて多岐であるという事実それ自体が、これらの諸問題にはハッキリとした答えなどなく、これらの諸問題があやまった仮定のように成立しているということを証明している。

当然のことながら、中国における奴隸制の役割りが評論の重要な焦点となってきた。わたくし自身の調査によると古代中国の社会は厳格な階級的ヒエラルヒーによって組織されていた。召使いの最下級のものには明らかに身分的に自由でなかったし、このかぎりで一般的な意味で「奴隸制」と呼ぶこともできるが、かれらの地位は世襲できめられたのであって、その点では、かれらより上の階級となら変わったところはない。この時期は、政府の組織に関するかぎり、ヨーロッパの封建制に最もよくにているのであって中国版の「封建制」ということができる。この時代には戦争の補虜は、すぐさま帰されなかった場合には、通例ギセイにされたのである。かれらが、時おり生産的目的に使用されたというたしかな証拠はない。戦国時代(紀元前三世紀—四世紀)の終りごろになって、古い社会が崩壊し、もっと流動的な社会が出現したとき、奴隸制度は新たな制度として現われてきたように思われる。土地の売買とやらんで、人間の売買が現われてきたのである。